

'16

受験
番号

前期日程

教育人間科学系共通 小論文問題

(教育学部)

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題に落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所等があった場合には申し出てください。
3. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
4. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
5. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。
6. 時間は120分です。

1 下の表は、厚生労働省が発表した平成10年と平成25年の、世代ごとの死亡数(人)および死亡率(10万人に対する死亡率)のうち、19才までをぬき出したものである。5才ごと、原因別に上位3位を示した(0才だけは別に示している)。

この2つの表から読み取れることを述べなさい。

また、あなたの分析を、より正確に考察するためには、他にどのような統計があったらよいと思うか。1つ答えて、その理由を述べなさい。(600字以内)

平成10年									
	第1位			第2位			第3位		
	死因	死亡数	死亡率	死因	死亡数	死亡率	死因	死亡数	死亡率
0才	先天奇形等	1,581	131.4	呼吸障害等	673	55.9	乳幼児突然死症候群	359	29.8
1～4才	不慮の事故	441	9.3	先天奇形等	256	5.4	悪性新生物	121	2.6
5～9才	不慮の事故	353	5.8	悪性新生物	139	2.3	先天奇形等	75	1.2
10～14才	不慮の事故	210	3.0	悪性新生物	166	2.4	自殺	93	1.3
15～19才	不慮の事故	1,270	16.4	自殺	609	7.9	悪性新生物	303	3.9

平成25年									
	第1位			第2位			第3位		
	死因	死亡数	死亡率	死因	死亡数	死亡率	死因	死亡数	死亡率
0才	先天奇形等	807	78.4	呼吸障害等	308	29.9	乳幼児突然死症候群	122	11.8
1～4才	先天奇形等	141	3.4	不慮の事故	109	2.6	悪性新生物	83	2.0
5～9才	不慮の事故	106	2.0	悪性新生物	104	2.0	その他の新生物	35	0.7
10～14才	悪性新生物	97	1.7	自殺	91	1.6	不慮の事故	66	1.1
15～19才	自殺	454	7.6	不慮の事故	335	5.6	悪性新生物	149	2.5

出典) 厚生労働省「人口動態統計年報」死因順位(第5位まで)別にみた年齢階級・性別死亡数・死亡率(人口10万対)・構成割合(改変)

注) 「悪性新生物」とは、いわゆる「小児がん」のこと、「その他の新生物」とは「良性腫瘍など」のこと、「不慮の事故」とは交通事故・溺水・転落などのこと、「乳幼児突然死症候群」とは赤ちゃんなどに起こりうる突然の呼吸停止のことである。

また、10万人に対する死亡率とは、その年代の子ども10万人に対して、何人が死亡したかを示している。

2

以下の文章を読んで、筆者は「匿名」がどのように変化しているかとらえているか述べなさい。それを踏まえて、ネット社会の「匿名」について、プラスの面とマイナスの面をあげながら、あなたの意見を述べなさい。(600字以内)

インターネットの「掲示板」上での、少年による殺人予告や利用者同士の罵声のあびせ合い、メールによる脅迫やストーカーなど、急激な情報通信革命の浸透の中で、その「負の側面」とも言うべき陰湿で刺々しい現象が様々な形で顕在化している。この問題の本質を解くには、「匿名」下の人間の意識と行動」という分析視点が有効だと思う。

これまで「匿名」というと、マスコミへの投書や作品応募で、自分を知られたくないという理由によるものだった。その場合は、男か女か、何歳か、職業は何かぐらいしか示されないのだが、読者や視聴者は、「匿名」自体に対してはそれほど違和感を抱くこともなく読んだり聴いたりしてきた。ところが、ネット社会の出現は、「匿名」の意味や影響を大きく変えた。いったい人間は「匿名」の存在になった時、意識や人格が普段とどのように違ったものとなり、どのように行動するようになるのか。この問題を厳密にとらえるには、精神医学や心理学の専門家による研究が必要だと思うのだが、そういう研究はいまだほとんど見かけない。

しかし、少なくとも次のようなことは指摘することができると思う。従来の「匿名」による投書の場合は、メディアがそれを採用する時には、編集者が本人とコミュニケーションをとり、確認すべき点を確認したうえで掲載するという手順を踏む。つまり、その場合は匿名であっても情報の発信者(投書者)の社会的なアイデンティティ(自己同一性)は存在している。

これに対し、ネット社会の「掲示板」や「匿名ホームページ」や「出会い系サイト」などは、メディアの編集者のような中間のチェック機能が介入することなく、情報の発信者がどこの誰であるかを全く知られないまま、恣意的に情報を流し続けることができる。そこにおいては、情報発信者の社会的なアイデンティティは消えている。そして、パソコンやケイタイの爆発的普及は、社会的なアイデンティティを持たない姿なき情報発信者を無限に量産した。

半世紀以上前、私が小中学生だった頃、子どもたちの間で透明人間とかタイ

ム・スリッパをテーマにした小説がよく話題になった。相手に自分の姿を見られずに、どこにでも入っていける透明人間になりたいと、子どもたちはみな思った。それは無邪気な好奇心からだった。それがいまや、情報の世界で誰でもが透明人間になれるようになったのだ。そして気がつけば、透明人間になるとは、自分の社会的なアイデンティティを消すということだった。

(出典 柳田邦男「言葉の力、生きる力」新潮文庫 平成 17 年 pp. 222～224)